

## 第二節 無土器時代

### 1 概要

先述したように、土器の使用がなされず、石器だけを使用して人々が生活した時代を「無土器時代」または「先土器時代」と言う<sup>〔本書では無時時代の呼称を用いる〕</sup>。

わが国では、従来縄文時代以前のことについて、ほとんど学問的に解明されていなかったが、昭和二十三年相沢忠洋氏<sup>〔東毛考古学研究所〕</sup>によって、縄文式土器時代以前に、土器を使用せず石器のみを使用して生活した人々の生活があったことが証明された。これをきっかけにして、わが国の「無土器時代」の解明が急速に進んだのである。山形県内においても、続々と無土器時代の遺跡と遺物が発見され、その内容が明らかにされている。県内の無土器時代の解明は、比較的早くなされていたようであるが、学説として取上げられずにいた。

### 2 県内の無土器文化

『山形県の無土器文化、山形県文化財調査報告書』<sup>〔一九六四、山形県教育委員会〕</sup>は、次のことを紹介している（要約）。

「松森胤保翁は明治十一年弄石余談の中で、山岸貞栄所蔵品の中に一風変わった石を認め、この品を写生し載せている。この石器は長卵状で長さ九八ミリメートル、最大幅三二ミリメートルでその説明文は……異状物、表中凸ニシテ舟底ノ如ク、裡一平、色鼠ニシテ堅光……とある。これは表面は中央に稜線が通って凸起し、そ

の形は舟底の如くであり、裏面はただ一平面となっている、との事であるから第一次の剥離面なることが推察される。色は鼠色で質が堅いというから硬質頁岩と考えられる。」

このような条件からすれば当石器は、刃器または縦形搔器ではないかと推察される。松森胤保翁は縄文土器に伴う石器類に関しては、石の形に応じてそれぞれにふさわしく杖・斧・槍・匕きし・鏃やじりなどと分類したが、この小石器に関しては、異状物として特別な観察をしている。残念なことに出土地が明確にされていない。

内陸の最上川中流々域に住む若い研究者菅井進・田原真稔の両氏は、西村山郡の一角で、『縄紋』という雑誌により、日本の始源についての新しい歴史を探っていたが、昭和二十四年（一九四九）のこと、土器を伴わない粗雑な打製石器のあることに気づいた。出土地は最上川中流右岸の段丘上で、昭和十一年（一九三六）明鏡橋架橋工事の際に採取され、大竹国治氏方に保存されていたものである。これらの石器を実見した菅井氏は昭和二十四年雑誌『縄紋』に実測図を載せて報告したのである。氏は付着の土質を根拠として、赤色のローム層中出土と推定し、ローム層形成時代に遡り、形の上ではヨーロッパの旧石器に似ているという考察を下したのである。昭和三十八年にいたって、氏は更に論文を発表し、先の簡略な記述を補っている。しかしながら、氏の報告と見解は、ひとり本県の研究史にとっただけでなく、日本の考古学の研究史の上でも高く評価さるべきであった。人間の手に成る遺物は黒土層の中にあり、その下の洪積層の褐色土層になったら発掘は終了であると考えられていた学界の風潮に対し、黒土の下の褐色土層の中にも人工遺物があること、それは土器を伴わないものであることが承認されたのは、終戦後のことで、しかも、その主な端緒となった岩宿遺跡の明治大学による正式発掘相沢忠洋氏による槍先二形石器の発見こそ昭和二十三年秋であったがが行われたのは、菅井論文発表より六カ月遅い昭和二十四年九月のことであったのである。後年芹沢長介氏は、その著『石器時代の日本』の中で菅井論文の意義を高く評価している。同書は山形県内無土器時代遺跡として、二

六カ所を掲げているが、置賜地方では小国盆地の四カ所のみとなっている。

### 3 置賜地方の無土器遺跡

前掲『山形県の無土器文化』に依ると、

「東南置賜に於いて先縄文文化と確認し得る遺跡は未だ発見されていない。或いは今後とも置賜の東側において先縄文遺跡の発見されることはむずかしいかもしれない。というのは、東北において先縄文文化を作りあげた人間は石器の原材として硬質頁岩を用いている。本県において硬質頁岩の層位を見るのは、草薙層と呼ばれるもので、置賜の東側にその発達は少ないからである。ことに高島町の洞窟群は凝灰岩で形成されていることから見ても、先縄文文化人にとってこの地域での原石の入手は困難であったと思われる、その存在の可能性は薄くなる。」

ところで、米沢盆地の西側には草薙層の発達が著しく、凝灰岩と硬質頁岩が互層となり、米坂線を西に行く程、硬質頁岩の層位は優勢となる。最近興味深い問題を続々と投じているのは、西置賜郡の小国町にある遺跡群であるが、これは原石材の豊富な存在にあるということが出来よう。小国盆地の中心である小国町の周縁には約三段の段丘面がきれいに発達し、特に東縁（横川の左岸）では明白に類別できる。東山・平林両遺跡はその最上段にあり、一段低い面に横道・鳥谷沢遺跡が存在する。

又、長井市立図書館に陳列されている土器、石器の中に、無土器時代の石核が二コある。これは同市勸進代蔵京の山麓付近から出土したものと云う。

#### 4 白鷹町の無土器遺跡

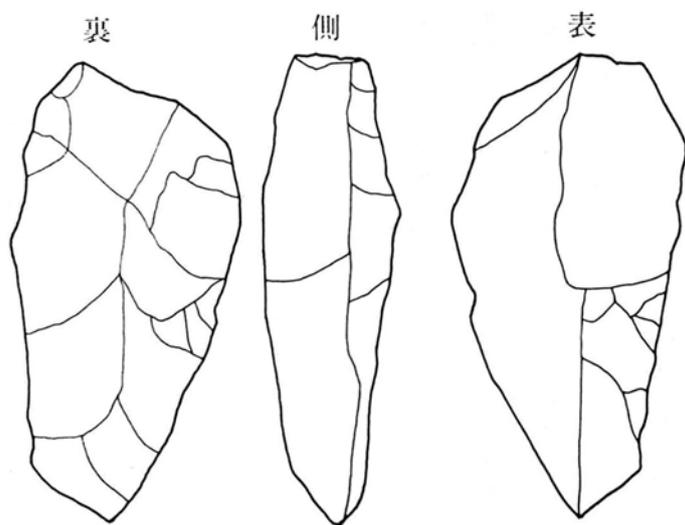
繰り返すが、無土器文化とは、縄文時代のように土器と石器を併用した生活でなく、石器だけを生活用具として暮らした時代のことである。残念なことに、白鷹町ではこの時代のものは、はっきりと確認されていない。しかしそれらしいものがないでもない。中山より山形に通ずる道路近傍の開墾地、或いは鮎貝小学校前方で、無土器時代の石器と見られるものを收拾している〔<sup>十王、平</sup>吹利数氏〕。

#### 5 飯豊町上屋地遺跡

無土器時代の遺跡として、町外ではあるが飯豊町上屋地遺跡を見逃すことはできない。

昭和四十二年（一九六七）山形県・新潟県を襲った猛豪雨は、各地に甚大な被害をもたらした。殊に飯豊山系・吾妻山系の降雨量は今迄にない記録的なものであった。同年秋、飯豊町方面の被害調査に当たった米地文夫氏〔<sup>山形大</sup>助教助〕は、上屋地より小国に通ずる道路入口の切通し付近で石器を採集した。これに端を発して翌年より総合調査が実施された。その結果、中津川谷底盆地は海拔四〇〇メートルの水面をもつ湖水であったことが判り、遺跡の位置は湖岸と断定した。発掘された石

第3図：上屋地遺跡出土の石器（実物の1/4大）



## 第二章 原始時代

### 第二節 無土器時代

器の種類の主なものには斜軸尖頭器、チヨパー、チヨピンググトウール、ハンドアックスなどである。